第３１４回くらしの植物苑観察会　令和７年８月２６日（土）

「幕末の変化朝顔」

仁田坂　英二 氏（九州大学大学院理学研究院　准教授）

18 世紀の中頃に岡山で珍しい絞り咲きの「松山朝顔」が生まれました。これは内在のトランスポゾン（動く遺伝子）が活性化しており、その子孫から多数のアサガオの変異体が生じました。その後、それらを集めて鑑賞する文化文政期の第一次ブームが起こりました。この時期のアサガオのほとんどは種子を結ぶ「正木」で比較的シンプルな形のものが鑑賞されていました。

幕末の嘉永安政期になると再び大坂・江戸およびその周辺都市を中心とした第二次ブームとも言うべき隆盛を迎え、浮世絵と同じ技法で印刷した朝顔図譜や番付表が出版されました。ブームを牽引した栽培家として植木屋の成田屋留次郎（図 1b）と旗本の鍋島直孝（杏葉館; 図 1f）が特に有名です。この時期の図譜を見るといくつもの変異が組み合わさった、複雑な形のアサガオが鑑賞されていたことがわかります。これらは「出物」とよばれる種子をつけないアサガオです。

嘉永安政期の図譜には文化文政期の図譜と違って栽培や育種方法の記述は見られません。そのため、どのように栽培していたか想像するしかありませんが、文化文政期でも少し触れられていた、一見正常に見えるきょうだい株である「親木」から採種して、それから分離してくる「出物」を鑑賞するという方法が確立していたと思われます。まいた種子から様々な形のアサガオが分離することから、文化文政期のように固定した品種名を付けることができません。そのため、「見立て名」または「花銘」とよばれる、個々のアサガオの葉の色や形、花の色や模様、形を順に記す命名法が確立しました。また、花銘に使う名称は、場当たり的につけた形容名ではなく、そのアサガオがどのような変異を保持するか認識した上で、変異ごとに決まった名称が使われていました。この名称は第三次ブームでも引き継がれ、現在でも使われています。ただし、これらの複雑なアサガオも、植物の受精の仕組みが広く一般に知られるようになる明治後期(1895 年)までは人工交配ではなく、栽培されている様々なアサガオの間で昆虫による自然交雑が起こったものを選抜することで作り上げたものだと考えられます。第一次ブームの頃から、子葉や本葉の形と花の形には関連があることが知られていたため、この頃には苗の段階で交雑株なども含め、より正確な鑑別が行われていたのかもしれません。

今回、嘉永六年(1853)に大坂で出版された朝顔花併（あさがおはなあわせ）から文久元年(1861)に江戸で出版された朝閑々美（あさかがみ）までの、朝顔譜を除いた 6 つの図譜に掲載された 276 図から、当時どのようなアサガオが栽培されていたのか、図と花銘から遺伝子型を推定し詳しく見てみました。花銘の最後は八重や牡丹度咲など、花弁の重ね（数）を書いていますが、276 図のうち 249 図（90%）が八重か、八重から派生して生じた牡丹のいずれかです。そのため、花の小さな変化朝顔では花弁が少なく寂しく見える一重咲きは特段の理由がない限りは鑑賞の対象外だったことがわかります(図 1a-f)。

現在まで保存されているアサガオのほとんどの変異は文化文政期の第一次ブームの頃に生じていますが、嘉永安政期になって初めて見られる変異もいくつか存在します。花の中央の花筒が折れて飛び出した様子が茶台に似た「台咲」は、文化文政期のころは葉が平坦なもの（並葉台咲; 図 1b-c）しか記録されていませんが、嘉永安政期には、葉に細かい凹凸がある「縮緬葉台咲」が初め

て記載されています（276図中、71図; 図1a)。それは縮緬（ちりめん）や砂摺（すなずり）という文字が花銘に含まれていることからも確かに葉に凹凸があることが分かります。第三次ブーム以降では針葉などでしか利用されていない「南天」もこの時期に出現し多数見ることができます(34/276; 図1b-c)。「桐」や「六曜」と呼ばれたアサガオ(30/276; 図1d)もこの時期に出現しており、大型の豪華な花を咲かせるため好まれていましたが、大正期には絶種となってしまいました。「乱菊」は、花弁が増えて菊咲ともよばれ、比較的大きく咲くことから明治の第三次ブームの前によく栽培されていました（16/276; 図1a)。現在の大輪アサガオの基幹変異で、花弁を増やす「洲浜」もわずか3つの図だけですが、この時期に初めて記載されています（図1e)。

図1: 嘉永安政期に出現した変異

a. 縮緬葉台咲・乱菊　朝顔三十六花撰
b. 南天（並葉台咲）　*三都一朝
c. 南天（並葉台咲）　*朝顔花併
d. 桐 =六曜　*朝閑々美
e. 洲浜　朝顔三十六花撰
f. 風鈴（獅子）　朝顔三十六花撰

*国会図書館デジタルコレクションより（　）内は文化文政期に出現した変異

嘉永安政期にどのようなアサガオが好まれ、多く栽培されていたか図譜の掲載数で判断してみます。それは縮緬葉台咲または並葉台咲の牡丹咲である「台咲牡丹」と台咲牡丹の花弁が南天、乱菊、立田のいずれかによって切れて中央の飛び出した台が目立つようになった「車咲牡丹」で、276図のうちの約半数、140図を占めます（図1a-c)。この台咲牡丹系を偏重した理由は、このジャンルのアサガオは台咲と牡丹以外の形を整え鑑賞価値を高める修飾変異があまり必要ではなく、昆虫による自然交雑でもそれなりに鑑賞に耐えるアサガオが出来たからでしょう。第三次ブームで発達する花弁の整った糸柳葉采咲や風鈴獅子咲(図1f)に必要な変異もこの時期にはそろっています。しかし、糸柳の分離比は他の出物と比べ16分の1と低く、風鈴獅子や管弁獅子は従来考えられていたより複雑で、単一の獅子変異に加えて、花弁の形を整え、「花芸」のレベルを上げる複数の修飾変異を持っていることが明らかになっています。そのため、台咲や車咲牡丹以外の鑑賞価値の高いアサガオを作るには人工交配が普及するまで待つ必要があったのではないでしょうか。

この観察会では、幕末に流行したアサガオについて、最新の遺伝子研究の成果も駆使し当時のアサガオの実態や育種技術に迫ってみたいと思います。

次回予告　第３１５回くらしの植物苑観察会　令和７年９月２６日（金）

※平日開催となります。ご注意ください。

「土器から読み解く先史時代の植物とくらし」

山下　優介（当館 研究部考古研究系 テニュアトラック助教）

１３：３０～１５：３０　くらしの植物苑　東屋　申込不要